AAS

二〇二四年度　適性検査

「国語総合」（古文・漢文を除く）

解答番号　1 ～ 27

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

都市の人口集中により、農業など一次産業の従事者は都市から追い出されてしまうことは避けられない。でもそのかわり、二次・三次産業の担い手には事欠かない。労働力が多様だということは、パートナーを求める独身者はもとより、共働きでふたりとも収入がある状態でいたいという夫婦やカップルにとっても都市は魅力的な場所になる。

技術や技能が高い人も高い賃金を求めてやってくる。高賃金をもらっている人たちが増えれば、高い家賃の住宅へのニーズが広がり、居住環境の道路や公園などの整備が進む。加えてわざと低所得の人たちにはアクセスできないようなゾーンをつくってしまう。そのゾーンには必然的に名門校などの教育機関などが進出するため、高い教育を受ける機会も多くなる。居住環境の質は賃金という労働条件に依存するのだ。

「都市の勝利」がそうであるように、たいていの都市論は「市民」「消費者」あるいは「観客」など、経済的な観点から語られることが多い。(1)「消費者」「観客」の立場だけに終始する評価や批評は、結果として都市を労働と生産をめぐる歴史的な節点として理解することを遠ざけていく。「同時代」を人間の奥底に装備されたセンサーとして理解し、そこから労働と生産の可能性を再検討しようとする地道な試みなど、とてももどかしいものに思えるだろう。その理由は明白だ。労働と生産をめぐる愚直な都市論など、いまや顕示的な消費の対象になりえないからだ。消費の観点から見ると、都市は祝祭そのものになる。

都市の祝祭性が高まる一方で、市場としての都市に住む人たちには経済的に貧しい人たちも多い。しかし(2)「都市の勝利」という理屈は、都市に貧しい人たちが多いという状況ではひるまない。都市の目線は徹底して高い。都市に住んでいるから貧しいわけではない。貧しい人が都市の豊かさに期待して集まってくるという理屈だ。貧しい人たちが目立っている都市もあるが、貧しい人たちも都市にはさまざまな可能性がたくさんあると信じている。つまりいろんな仕事があって、**A**　自分にも大きな成功が待っているかもしれないと期待して集まってくるのだ。

「都市の勝利」という理屈のうえでは、地方で収益が上がらない農業に従事しているよりも、都市では人々が集住しているぶんサービス業が必然的に多様になるため、どんな人にとっても当然仕事のチャンスは増えるということになる。

もちろん地方にも気候風土に応じた仕事があって、そのなかには世界のなかで比較的特異な産業に位置づけられるようなものもある。しかしながら、職種の多様さという点では地方は都市にかなわない。多様な職種はいろいろな人たちが集まってくる理由になり、集まれば集まるほどさらに労働の種類は多くなっていく。どんな仕事を求めている人にとっても、都市とは自分を労働力として買ってもらえるかもしれない可能性であり、［X］。

その例としては、プロのミュージシャンが人里離れた場所を労働の場とすることはむずかしい。フェスのような特殊なイベントを除いて、ライブにくる聴衆がいないからだ。住んでいる場所が人里離れた場所であっても、ライブはいや応なく都市でやらざるをえない。さまざまなシュミ(a)嗜好（しこう）の人が都市には集まっているだけに、ライブは成立する。だが、人があまり住んでいない地方では、プロのミュージシャンが客を獲得することはむずかしい。

このミュージシャンの例によらずとも、日常生活の延長線上に、アート、インテリア、ファッション、建築、グルメなど、あ(3)らゆる表現が商品と一体化し大衆化していて、都市の生活様式に寄り添っている。

二十世紀以降の都市文化では、美術や建築、演劇など古代からある表現形式も、時代の推移とともに洗練された都市文化として理解され、ある種の顕示的消費として市場に組み込まれることになる。それによって、アートは都市に住む人々の顕示的な消費を誘発し、市場を拡大する。「おしゃれ」な都市文化は顕示的な消費としての洗練度を高めれば高めるほど、当然ながら市場は拡大するのだ。

結果的にあらゆるものが消費の対象になり、資本主義は国家や地域を軽々と乗り越えて侵入する。美術館、ギャラリー、雑誌、アート系非営利団体など、アートのプラクティス（実践）が記号消費のシステムと化した都市では、心地いい飛躍と破綻が娯楽になる。確かに、飛躍と破綻は根本的に人間の知性や都市生活にとって、ちょっとした祝祭である。

神の(b)ショギョウにも近い地位を与えられるほど崇高で深淵（しんえん）だったはずの芸術も、資本主義の爛熟（らんじゅく）さに応じるかのように、消費の対象となり市場原理に依存した「業界」ができあがっている。アートに関連した仕事は、当然ながら都市に集中することになる。市場としての都市は、［Y］。

だからこそ、市場としてのニューヨークやパリには自分（とその作品）を買ってもらえるかもしれないアーティストたちがたくさん集まってくるし、作品に公的な(c)ケンイを与える美術館、コレクターに作品を売る画商、作家のマネジメントをしたりパーティーを開いてパトロンから資金を集めたりする業者など、少しでも顕示的な消費財としての芸術作品を高く見せるようなサービス業が発達していく。これもまた無理のない話である。

顕示的な消費についてミッキーマウスを念頭に考えてみると、ぐっと具体的に理解できるかもしれない。ミッキーマウスは二十世紀が生んだ奇跡の記号である。ディズニーランドでの主役の座は揺るがないばかりか、いまだにさまざまなグッズのデザインに採用されて目に触れる機会は多い。ビートルズやマイケル・ジャクソン、クリスチアーノ・ロナウドを知らない人がいても、ミッキーマウスを知らない人はおそらくいないだろう。まさに底知れぬ人気である。顕示的消費を絵に描くとミッキーマウスになると言っていいだろう。

ミッキーマウスは考案された、いわばイメージである。ミッキーマウスが好きでグッズを買い求めている人たちは、［B］イメージを消費している。このように、表現が顕示的な消費財となることに抵抗し批判する先人たちはこれまでにもたくさんいた。その代表的な歴史家が(注1)ヴァルター・ベンヤミンである。ベンヤミンは都市に生きる人々を観察しながら、搾取の場が工場だけにとどまらず、ミッキーマウスのように日常生活にまで広がっていることを「同時代」、つまり宇宙の歴史からすれば「一瞬の裂け目」でしかない共通の経験として描写し、人間の奥底にある欲望や歴史のあり方を再検証しようとした。

もちろん、ベンヤミンの「一瞬の裂け目」への関心は、当然ながら日常生活のさまざまな局面で資本主義という経済体制が暴力としてはたらいている状況にある。ベンヤミンはミッキーマウスを暴力装置として論じたのである。

ベンヤミンはミッキーマウスを、映画という複製技術と近代的な産業のヒョウショウ(d)として位置づけた。この映画という複製技術の日常生活への影響力を念頭に置いて、テクノロジー（複製技術）によって装置（メディア）化された日常生活で活動する記号化されたキャラクターとしてベンヤミンはミッキーマウスを論じた。実はメディア化された日常生活を平穏に送ろうとする人間さえ、なんらかの拍子でミッキーマウスの暴力にさらされてしまうことをケイカイ(e)する。ビートルズやマイケル・ジャクソン、クリスチアーノ・ロナウドはミッキーマウス化した人間であるとも言える。

ここでのメディア化とは、日常生活のあらゆるもの、たとえば人間でさえ伝達の装置と化してしまうような事態である。資本主義への隷属によって、都市生活の経験が貧しくなっていく状況をベンヤミンは「ミッキーマウスの生活は、こんにちのひとびとの夢である。ミッキーマウスの生活は、奇跡にみちている」と皮肉たっぷりに述べる。

人間が表現したはずのミッキーマウスが、自らがあたかも生命を与えられたかのように商品として増殖し、社会のなかで際立つ存在となったことをベンヤミンは資本主義の亡霊として読み取っている。

ミッキーマウスはあまりにも消費の対象として独自性をもつからこそ、その偏愛ぶりや物神性(注2)を発揮することになった。結果的に、たかがアニメーション映画のキャラクターだったにもかかわらず、人々を激しい偏愛のパラノイア(注3)状態に陥れる。それらを生み出した人間自身を、逆に支配してしまう疎遠な力になってしまっている。この疎遠な力は、まさにヘーゲル(注4)以来論じられてきた疎外である。

疎外をめぐる近代以降の都市はそもそも生産と労働の市場として拡大してきた。とりわけ、自分では生産手段をもたず、生活のために自らの労働力を時間で切り売りして賃金を得るプロレタリアート（賃金労働者）にとって、都市生活を送っていくうえでのさまざまな局面が複製技術によるヒョウショウとしてしか存在しなくなりつつある状況が顕著となっている。

そのプロレタリアートがどのような内容や規模の労働市場に関わっているかに応じて、集住の条件は変わり、都市の様相も大きな影響を受ける。産業資本主義を基礎とする都市のあり方は、(4)労働者階級や無産階級とも呼ばれるプロレタリアートの市場と

いう貌を必然的にもつのだ。

（桂英史『表現のエチカ ―― 芸術の社会的な実践を考えるために ――』より）

（注１）ヴァルター・ベンヤミン ―― 一八九二～一九四〇年。ドイツの歴史学者・文芸批評家・哲学者。

（注２）物神性 ―― 商品や貨幣、資本などの「物」が、ひとり歩きを始め、逆に人間を支配するように見えてくる現象。

（注３）パラノイア ―― 偏執病。妄想症。

（注４）ヘーゲル ―― 一七七〇～一八三一年。ドイツの哲学者。

AAS

問1 傍線部(a)～(e)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ選びなさい。解答番号は、(a) 1 、(b) 2 、(c) 3 、(d) 4 、(e) 5 。（配点10点）

(a) シュミ

1

① シュチョウを投票で選ぶ。
② 因縁の相手にイシュ返しする。
③ 勝利のビシュに酔いしれる。
④ シュショウな態度に感心する。
⑤ 原稿にシュヒツを入れる。

(b) ショギョウ

2

① 茶を一杯ショモウする。
② 寺のユイショを調べる。
③ ショハンの事情を考慮する。
④ 異動でブショがかわる。
⑤ 違反者をショバツする。

(c) ケンイ

3

① イアツ的な態度を取る。
② 部下にイロウの言葉をかける。
③ 役所の手続きをイニンする。
④ 雄大な景色にイフの念を抱く。
⑤ 親のイダイさに気づく。

(d) ヒョウショウ

4

① キョショウの絵を鑑賞する。
② 伝統文化をケイショウする。
③ 大会優勝にショウジュンを合わせる。
④ 作者ミショウの物語を読む。
⑤ ショウケイ文字を解読する。

(e) ケイカイ

5

① 村上春樹にケイトウする。
② 朝から剣道のケイコに励む。
③ ネット社会にケイショウを鳴らす。
④ 彼の意見にケイハツされた。
⑤ 傷害事件のケイイを語る。

問2 空欄 A ・ B に入る最も適当な語を、次の中からそれぞれ選びなさい。解答番号は、A 6 、B 7 。（配点4点）

A 6

① たとえば
② ますます
③ あたかも
④ ひょっとすると
⑤ くしくも

B 7

① まさに
② いつも
③ いまだに
④ おそらく
⑤ むしろ

AAS

問3　空欄 X ・ Y に入る最も適当なものを、次の中からそれぞれ選びなさい。解答番号は、X 8 、Y 9 。（配点6点）

X 8

① 社会的地位の保証なのである
② 住むための必要条件なのである
③ 修練を積める場所なのである
④ 人を集める口実になるのである
⑤ 乗り越えるべき壁なのである

Y 9

① アーティストに再び崇高な役割を与えるのだ
② アーティストによって祝祭の場が盛り上げられるのだ
③ アーティストに労働者としての社会的な地位を与えるのだ
④ アーティストの作品に消費者の嗜好を反映させることになるのだ
⑤ アーティスト自身をサービスの業者にしてしまうのだ

問4 傍線部(1)「『消費者』『観客』の立場だけに終始する評価や批評」とあるが、それはどういうものか。その説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、10 。 （配点5点）

① 人口の集中や物の流通といった経済システムの完成度だけに着眼して都市を歴史的に考察するもの。
② 賃金や労働をめぐる経済活動に支えられた居住環境の質の良さだけを都市の特徴として述べるもの。
③ 高価な商品を買い求める富裕層の価値基準に沿ってことさら都市の優位性だけをうたいあげるもの。
④ 環境の経済的な成熟度やそこから期待される便益だけを論点にして都市のもつ価値を判断するもの。
⑤ 商品やサービスを購入する人たちが感じている利便性の高さだけを都市の機能としてたたえるもの。

問5 傍線部(2)「『都市の勝利』という理屈」とあるが、それはどのような考え方か。その説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、11 。 （配点6点）

① 都市は普遍的な祝祭の場であり、人々の成功の可能性に先立って都市そのものの魅力が存在するという考え方。
② 都市は経済的に成功した場所であるため、貧しい人々が住んでも都市の豊かさがゆらぐことはないという考え方。
③ 都市は豊かであることが前提であり、さまざまな可能性を求めて貧しい人々が集まるようになるという考え方。
④ 都市は職種の多様さが保証されており、労働の場を提供することで貧しい人々を救うことができるという考え方。
⑤ 都市は人々が高い所得を得る空間であり、貧しい人々にも仕事で成功するチャンスが与えられるという考え方。

AAS

問6 傍線部(3)「あらゆる表現が商品と一体化し大衆化していて、都市の生活様式に寄り添っている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、12 。 （配点6点）

① あらゆる表現は、「おしゃれ」のための消費財へと姿を変えて、都市を文化的な側面から彩っているということ。

② あらゆる表現は、拡大する市場の動きに合わせるように、人々の顕示的消費を誘発する存在になったということ。

③ あらゆる表現は、都市での生活を非日常なものに変える手段として、人々の娯楽の対象になっているということ。

④ あらゆる表現は、二十世紀以降の都市文化において形式を見直され、時代とともに志向を変えてきたということ。

⑤ あらゆる表現は、都市生活で消費される製品やサービスとして理解され、市場の原理に順応しているということ。

問7 傍線部(4)「労働者階級や無産階級とも呼ばれるプロレタリアートの市場という貌を必然的にもつ」とあるが、「都市」が「プロレタリアートの市場という貌を必然的にもつ」のはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、13 。 (配点6点)

① 近代以降の都市の形成は、生産手段をもたない賃金労働者による資本主義的な労働に基づいているから。
② 都市を拡大してきた近代以降の市場は、労働者が携わる産業資本主義的な市場と密接な関わりをもつから。
③ 複製技術のシンボルである都市の姿は、賃金労働者が関わる市場の様相をそのまま反映したものであるから。
④ 産業資本主義を基礎に成り立っている都市は、賃金労働者が携わる仕事の内容や規模を左右しているから。
⑤ 生産と労働の場である都市のあり方は、都市生活を送る賃金労働者の集住条件により決定づけられるから。

問8 本文の内容に合致するものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、14 。 (配点6点)

① 現代の都市論の多くは、一つの時代の特徴に着目して、そこから労働と生産の可能性を探る傾向にある。
② 都市は人が集まり住むため職種が多彩で、世界で比較的特異な産業として分類されるような仕事が多い。
③ アーティストたちがニューヨークやパリに集まるようになるのは、絶対的な社会的権力を得るためである。
④ ミッキーマウス化した人間とは、映画という複製技術を通して知名度を高めた特別な人々のことを指す。
⑤ 生産物は、時として人間の想定を超えた影響力を伴い、独自に活動するかのように現象することがある。

AAS

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

文明が大きな変貌を遂げていく中で「人間とは何か」を問うた先人がいます。十九世紀末フランスの画家、ポール・ゴーギャン(注1)（一八四八～一九〇三）です。

「我々はどこから来たのか　我々は何者か　我々はどこへ行くのか」(1)

後世、ゴーギャンの代表作としてその名を残すこの絵画は、一八九七年、故郷のフランスから遠く離れた南の島タヒチで、描き上げられました。

急速に変化を遂げていく文明社会に対する懐疑と絶望、そして、そうした文明をつくり上げた人間という存在に対する根源的な問いかけ。それらを、ゴーギャンは絵画という芸術に見事に昇華(X)させました。

この絵画が、一〇〇年以上の時を経ても多くの人の心をつかんで離さないのは、その「問いかけ」がいまだに大きな意味を持ち続けているからに他なりません。むしろ、時を経るに従って(2)、その「問いかけ」の持つ意味合いはさらに増しているようにも思います。

しかし、そうしたこと以上に私が重要だと思うのは(3)、彼がそうしたテーマを、タヒチという場所で問い直したという事実です。世界を外から見て初めて世界とは何なのかが見えてくる。先に私はそう書きました。まさしくゴーギャンは、文明の辺境に行くことで、文明とは何かを見つめようとしたのではないでしょうか。無論、彼自身の中に、そういった意識があったかどうかは分かりません。あるいは、文明によって失われた「何か」を求めて南太平洋の島タヒチに行ったのかもしれません。

しかし、結果として彼が絵で描いたのは、美しい楽園の姿といったものではなく、普遍的な人間の姿であり、人間の存在そのものに対する根源的な問いかけでした。

つまり、(4)文明から遠く離れたタヒチにあっても、彼は最後まで文明の世界の人だったということです。結局のところ彼は、文明の外から文明を、文明という生き方をつくり出して生きている人間を、そして文明の世界の住人である自分自身を見つめていたように、私には思えます。

そして、もうひとつ重要なのは、(5)彼の「辺境から文明をながめる」という試みを可能にしたのが、他ならぬ彼が懐疑と絶望を抱いた文明そのものの力であったということです。

このことこそ、文明と人間の関係について考える際の重要なポイントであり、本書で問おうとしているテーマにも深く関わるものです。

(6)その意味では現代という時代もまた、ひとつ進んだ段階からの試みを可能にしています。我々は今や地球を脱し、宇宙の果てにまでその観測の視野を拡(ひろ)げているからです。地球の辺境から文明を問うたように、現代は宇宙の辺境から文明を問うことができるのです。言葉を換えて言えば、辺境に立つことはものごとの普遍性を探ることにつながるのです。

二十世紀、我々は宇宙の認識を深め、終(つい)に、物理学と化学はこの宇宙で成立する普遍性のある学問であることを確かめました。二十一世紀は、その普遍性を、地球や惑星の科学、生命の科学にまで拡張しようとしています。そしてそれは、知的生命体、あるいは文明についての普遍性を問うことを可能にしているのです。

このことを考察するためには、ゴーギャンの生きた時代を歴史という観点に立ってながめてみる必要があります。なぜなら、そうすることではじめて、彼の時代の問題を、現代の問題としてとらえ直すことが可能となるからです。

ゴーギャンが生きた十九世紀末、現代から見れば約一〇〇年前の時代とは、どういう時代だったのでしょうか。地球システム論的な視点でいえば、文明が第二段階に突入し始めた頃ですが、我々の世界ではどのような変化が、どのようなかたちで起きていったのでしょう。

ひと言でいえば、我々の宇宙観、歴史観、自然観がドラスティック(注2)に変わった時代です。

これからしばらくは、現代文明の A 、すなわち産業革命以降に起きた様々な変化、とりわけ我々の内部で起きた宇宙観や歴史観、自然観といったものの変化について見ていきたいと思います。

まずは宇宙観の変化から見てみましょう。

古代ギリシャ時代、宇宙とは天のことでした。天とは空のことです。現在、我々が言うところの宇宙とは、空間的には天の外にある天、すなわち中国語で言うところの「天外天」ということになります。

現在、我々が惑星と呼ぶ天体も、恒星も、銀河も、すべては同じように天に存在するものでした。もちろん当時、恒星とか銀河とかそんな区別があったわけではありません。

太陽を含め、そうした天にある天体と地球がどのような関係にあるのか。それが、宇宙に関する最大の関心事でした。宇宙の中心は地球なのか、太陽なのか。なぜ、一部の星（惑星）だけが、他の星たちとは違う変則的な動きをするのか。

それらについて合理的な説明を与えることが、古代ギリシャやそれ以降の自然哲学者たちの役割だったわけです。

意外に思われるかもしれませんが、紀元前五世紀頃のイオニア(注3)の自然哲学者たちは、今でいうところの地動説という考え方でした。それが当時重要視されていた合理的な説明だったのです。

しかし、地球が動いているという事実は、人々の感覚とは相容(あいい)れません。太陽のまわりを動いているとしたら、ものすごい風

が吹くだろうに、そんな風は吹かないからです。

というわけで、人々は地球のまわりを天が動いていると考えるようになったのです。その信仰に似た考え方が中世まで続きます。

十六世紀、太陽中心説を唱えるコペルニクス（一四七三～一五四三）の登場によって宇宙観は大きなテンカン(a)期を迎えます。そして、その後、ケプラー(注4)、ガリレオ(注5)を経て、太陽を中心とした宇宙観が時代の主流になっていきます。

ただ、そこで語られる宇宙は、現代風にいえば、太陽系どまりの宇宙でした。そうした宇宙観が、十八世紀から十九世紀にかけて、一気に拡大します。太陽系を超えて銀河系という星の世界を認識するようになるからです。

ここで、現代の宇宙観、宇宙の構造について簡単に説明をしておきましょう。

地球は太陽という恒星のまわりを回る惑星のひとつです。太陽を中心とする星の集まりを太陽系といいます。太陽系の外側では、太陽のような質量の天体（恒星）が一〇〇〇億個ぐらい、太陽とは質量の異なる天体まで含めると二〇〇〇億個ぐらいの天体がひとつの集団をつくっています。これが銀河系です。

銀河系は円盤状の形をしており、そのチョッケイ(b)は一〇万光年くらいの広がりがあります。円盤の中心からいくつかの腕が伸びてウズ(c)を巻いたような形を見せているのですが、我々の太陽系は、そのひとつの腕の端のほうに位置し、他の天体と一緒に二億～二億五〇〇〇万年で一周するくらいの運動をしています。

銀河系の外側に行くと物質的にはほとんど何もない空間が広がっていますが、その所々には、何千億と推定される数の別の銀河があることも分かっています。

しかしながら、人類がここまでの拡大した時空の宇宙観を持つようになったのは、歴史的に見ればつい最近のことに過ぎませ(7)

ん。そして、太陽系を超えたこのような宇宙観は、まさにゴーギャンの時代の直前から始まったのです。

（松井孝典『我関わる、ゆえに我あり』より）

（注１）ポール・ゴーギャン――フランス後期印象派の画家。
（注２）ドラスティック――徹底的。思いきったさま。
（注３）イオニア――古代ギリシャの植民地。都市国家が形成された。
（注４）ケプラー――一五七一～一六三〇年。ドイツの天文学者。
（注５）ガリレオ――一五六四～一六四二年。イタリアの天文学者・物理学者。

AAS

問1 傍線部(a)～(c)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ選びなさい。解答番号は、(a) 15 、(b) 16 、(c) 17 。（配点6点）

(a) テンカン

15

① ユウモウカカン
② アビキョウカン
③ イカンセンバン
④ ショシカンテツ
⑤ カンコツダッタイ

(b) チョッケイ

16

① 直情ケイコウな性格といえる。
② 面白い記事をケイサイする。
③ 音楽にゾウケイが深い。
④ ケイセツの功を積む。
⑤ ソウケイな決断を後悔する。

(c) ウズ

17

① 優雅なキュウカを楽しむ。
② 将来に大きなカコンを残す。
③ 工場のカドウ日数を増やす。
④ 彼は疑惑のカチュウにある。
⑤ 戦闘がカレツをきわめる。

AAS

問2 傍線部X「昇華」の本文中における意味として最も適当なものを、次の中から選びなさい。
解答番号は、18。

① 美的なものに変質すること
② 異質なものに変えること
③ 価値あるものに高めること
④ 自分のものにすること
⑤ 美しく華やかに彩ること

（配点3点）

問3 空欄 A に入る最も適当な語を、次の中から選びなさい。
解答番号は、19。

① 胎動期　② 勃興期　③ 過渡期　④ 最盛期　⑤ 成熟期

（配点3点）

問4 傍線部(1)「我々はどこから来たのか　我々は何者か　我々はどこへ行くのか」とあるが、これはどういうことを問いかけているのか。その説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、20。　（配点4点）

① 人類の歴史にもとづく未来の姿
② 過去をふまえた人間のあるべき姿
③ 人間という存在のもつ意味
④ 人間が人間として生きている意義
⑤ 文明社会の根源的なあり方

問5 傍線部(2)「時を経るに従って、その『問いかけ』の持つ意味合いはさらに増しているようにも思います」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、21。　（配点5点）

① 文明社会は、人間に利便性をもたらす一方で、人間の感性や知性を次第に退化させるものだから。
② 人間は、時間の経過に従って自分の人生に対する疑問や懐疑を増大させる存在だから。
③ 人間社会は激しく変遷する文明に応じて変容し、懐疑や絶望も徐々に変化するから。
④ 人間の存在にとって懐疑や絶望は必要不可欠なものであり、刻々と増大しているから。
⑤ 文明の変化の加速はとどまらず、社会や人間への懐疑や絶望が時とともに深まりつつあるから。

AAS

問6 傍線部(3)「そうしたこと以上に私が重要だと思うのは、彼がそうしたテーマを、タヒチという場所で問い直したという事実です」とあるが、筆者がこのように考えるのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、22。 (配点5点)

① タヒチという文明から隔離された辺境の島国で、文明世界を考察しているから。
② タヒチという島国の文化を解明することで、文明社会の普遍性を捉えようとしたから。
③ タヒチという文明の辺境に行くことで、辺境そのものの意味を解明しようとしているから。
④ 文明社会とまったく縁のないタヒチという島国で、文明の特殊性を探ろうとしたから。
⑤ タヒチという孤立した島国で、文明の重要性について考えようとしているから。

問7 傍線部(4)「文明から遠く離れたタヒチにあっても、彼は最後まで文明の世界の人だった」とあるが、筆者がこのように考えるのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、23。 (配点5点)

① 彼は辺境にあってもなお文明を断ちきれず、文明への憧憬を絵画の世界で表現しようとしたから。
② 彼はタヒチにいてもなお、文明をつくり出した人間の姿を描かざるを得なかったから。
③ 彼は辺境にあってもなお文明を否定できず、文明的な生き方を追求し続けたから。
④ 彼はタヒチにあってもなお、文明や文明世界を批判するような絵画を描かなかったから。
⑤ タヒチが文明社会から遠ければ遠いほど、彼は文明の持つ意味を明らかにしたいと考えたから。

問8 傍線部(5)「彼の『辺境から文明をながめる』という試みを可能にしたのが、他ならぬ彼が懐疑と絶望を抱いた文明そのものの力であった」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、24。 （配点5点）

① 文明には、辺境からながめてみようという思いを抱かせるような不思議な力があるということ。
② 文明が生み出す懐疑や絶望の向こう側にこそ、辺境の地での新たな発見があるということ。
③ 文明と辺境とを対比させようとすること自体、文明の申し子的な考え方であるということ。
④ 文明が発明したものによって、辺境という遠く離れた場所に行けるようになったということ。
⑤ 文明は懐疑や絶望に満ちており、辺境から文明をながめるとその姿が見えるということ。

問9 傍線部(6)「その意味では現代という時代もまた、ひとつ進んだ段階からの試みを可能にしています」とあるが、「ひとつ進んだ段階からの試み」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、25。 （配点4点）

① 宇宙の果てから文明の歴史そのものを考察すること。
② 辺境というあり方を、宇宙観測にも応用できるということ。
③ 人間が文明を破壊しつつあるという現実を把握すること。
④ 宇宙の辺境から文明を問い、ものごとの普遍性を探ること。
⑤ 知的生命体による文明の特殊性、独自性を問うこと。

AAS

問10 傍線部(7)「ここまでの拡大した時空」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、 26 。 （配点5点）

① 銀河系には空間や何もない無の世界が広がり続けており、それこそが人間を魅了するということ。
② 銀河系から太陽系をながめることで地球の本来の姿が見え、宇宙の本質が見えてくるということ。
③ 太陽系の中の地球から銀河系の中の地球へ、宇宙における地球の位置づけを変更したということ。
④ 銀河系の外側には何千億もの別の銀河があることを、私たちが認識できるようになったということ。
⑤ 太陽系から銀河系へと認識が広がり、銀河系が膨張していることを人類が発見したということ。

問11 本文の内容に合致するものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、 27 。 （配点6点）

① 世界の端にあるタヒチという場所には、ひとりの人間として歴史を振り返り文明のあり方を問う文化がある。
② ゴーギャンは、文明の外にあるタヒチという島から文明と文明の世界の住人である自分自身を見つめた。
③ 地球のまわりを天が動いているという信仰めいた考え方は、有史以来中世まで一貫して人々を支配していた。
④ 中国語で言うところの「天外天」は、空間的には古代ギリシャ時代の「宇宙」すなわち「天」に該当する。
⑤ 宇宙への認識を深め、地球という辺境の地を空から見直すことで、人間存在の謎も明らかになるに違いない。